

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 8 月 28 日現在

機関番号：34501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531319

研究課題名(和文) 世代間交流による患児への遊び・学び支援プログラムの実践的研究

研究課題名(英文) A Practical study of playing and learning support model construction for children in hospital by means of senior volunteering

研究代表者

栗山 昭子 (Kuriyama, Akiko)

芦屋大学・教育学部・教授

研究者番号：90149641

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：「世代間交流による患児への遊び・学び支援プログラム」の実践的研究では「病院の子ども憲章」に基づき入院中の子どもたちの保有する「遊び・学び」を支援した。5つの病院の協力のもとに、12人の高齢者ボランティアを養成し三年間、月2～3回「遊び・学び」の支援を行ってきた。徐々に子どもからのニーズが高まり、教材や遊び道具をベッドサイド用に開発してきた。手乗り紙芝居や発達に応じて使用できるドリルなどである。ボランティアはこれらの開発道具を携え定期的に病院の子どもたちに「遊びと学び」の支援を行った。医療関係者とも相互理解が深まりモデルプログラムとして定着した。このプログラムはカプラン氏からも注目されている。

研究成果の概要(英文)：The purposes of this study were to identify the needs of children in hospital and to examine the roles of senior volunteers. We (12 senior volunteers) visited five supporting hospitals in the Kansai area twice a month for three years. Our volunteers played with children and held seasonal events. Soon, we came to know the importance of our handmade playthings and textbook as suitable for hospital wards. We made small-sized picture books and workbooks for children. Additionally important roles of the volunteers were to protect the privacy of patients and their families, and exchange opinions with hospital doctors and nurses.

Matt Kaplan (Professor at Pennsylvania State University) was interested in this program and came to interview our 12 senior volunteers. We would like to cooperate with Professor Kaplan and would like to work together to make children in hospital better.

研究分野：特別支援研究

科研費の分科・細目：基盤研究C

キーワード：患児 高齢者ボランティア 遊び・学び 医療従事者 病院の子ども憲章 団塊の世代 病院の子ども憲章

1. 研究開始当初の背景

小児科は厳しい財政事情にあり、遊びの専門家を雇用できる経済的余裕はほとんどない。慢性の医師不足、救急体制の不備など危機的な環境にある小児医療の現場で、病児への日常的な遊び・学び支援には支援の手が届きにくい状況にある。闘病中の子どもにとって病院内での遊びや学びには限界はあるものの、どのような状況であっても遊び・学ぶ気持ちを満足させる権利は保障されなければならない。団塊の世代が高齢者入りをし、前期高齢者が激増している中で、高齢者ボランティアが社会貢献することは世代の融合に繋がる。世代間交流の方法で病院の子どもたちの遊び・学びを支援するプログラムを構築し普及させることはその意味で意義深い。また高齢者ボランティアが主導して遊び・学び支援をプログラム化することには、患児ばかりではなく、その家族にとっても負担を軽減し癒しの効果が期待される。

2. 研究の目的

(1) 病院の子どもたちの福祉・教育の向上
ヨーロッパで生まれた「病院の子ども憲章」は国連の「子どもの権利条約」の病院版として知られている。「子どもの権利条約」で謳われた積極的子ども観はこれまでの受動的子ども観にかわるものとして病院でも子どもの権利の拡充と保障が課題である。そこで医療現場の妨げにならず医療従事者の指示のもとで協力できるようシニアボランティアの養成と患児支援プログラムの普及を目指したものである。

(2) 団塊の世代であるシニアボランティアの有効活用

第二次大戦後出生したベビーブーマーが大学して高齢者入りし、元気高齢者の社会貢献が課題となっている。年金問題など世代間の軋轢が生じるなかで高齢者が子育て世代を応援することは世代の融合に繋がり円滑な社会の構成を実現することになる。その意味で前期高齢者入りをした団塊の世代のシニアボランティアが生きがいをもって社会貢献する方法として本プログラムを企画した。

(3) 慢性的に支援者不足にある医療機関への助力

医療費削減政策により小児医療は経済的に逼迫しているので、子どものメンタル面でのサポーターを雇用する余裕はほとんどない。そのような人手不足の小児科病棟で医療関係者に協力し患児の精神面を癒やすことのできる遊び・学びプログラムを行えるシニアボランティアを養成し、プログラムの定着および普及を図った。

(4) 患児の保護者の癒し手として

景気低迷のなかで経済的にストレスを抱えている患児の保護者は多い。またひとり親家

庭や共働き家庭が増え、患児に割ける時間が限られることから、保護者が精神的に追い詰められないよう間接的支援を行うシニアボランティアの存在は保護者にとって有用である。

3. 研究の方法

(1) 遊び・学び支援ボランティアの実施

芦屋市広報によって患児への遊び・学び支援ボランティアを募集し平均年齢 65 歳の 12 名のボランティアを選定した。

2012 年 3 月に 2 週間の養成講座(実習含む)を計 42 時間にわたって実施した。

同年 4 月より養成講座を修了したボランティア 12 名に協力を要請し、5 か所の子ども病院にボランティアとして登録した。

研究協力を得られた病院(大阪府立精神医療センター・草津養護学校・中野こども病院・吹田市こども発達支援センター)の医療従事者と連携をとり事前の打ち合わせを重ねた。研究協力の同意を得て、個人情報についてボランティアに周知するとともに倫理面への配慮を深めるために生命倫理・哲学講座を実施した。

本研究事務局にボランティアコーディネーター(車川幸子氏)を置き、それぞれの病院に月 1~3 回、ボランティア 3 名前後を派遣することとなった。その都度ボランティア報告書を提出してもらい、事務局(研究代表者)にて管理を行った。

月一度ボランティア報告会を芦屋市民センターまたは芦屋大学、芦屋学園短期大学において実施し、ボランティア実践のなかでの学び合いを個人情報保護の遵守のなかで行ってきた。特に気づきについて今後の活動の改善の観点から振り返りを行った。そのなかでボランティアによるプレゼンテーションを催しお互いの知識を補い深めるよう図った。

隔月に研究後援会を実施し、患児への理解を深め、より良い実践に結びつくように、医療福祉や看護学など関係方面からの識者を招き講演の後、討論会を催し知識の定着化を図った。

(2) 教材の開発

手乗り紙芝居の作成

病院という特殊な現場で医療の妨げにならないような教材開発を行った。具体的には紙芝居も手乗りのサイズで子どもが一人でも手軽に楽しめるものを印刷し、小児病棟 150 か所に配布した。さらに 2013 年 1 月 6 日ハワイで行われた国際教育学会

(International Conference on Education, 12th Conference)での発表に際し英文紙芝居を 100 部印刷し教育関係者に配布し、本プログラムの普及を図った。

切り離しドリル教材

ベッドという狭いスペースで手軽に取り組める教材であり、各自異なる進度に応じて切

り離すことのできるペーパー型ドリルを開発した。病状など多様な子どもたちを対象にしているので敢えて製本せず一枚ずつ切り離して使用できるものとした。

4. 研究成果

(1)遊び・学び支援ボランティアの実施

協力いただいた病院において医療関係者との連携をとるなかで、ボランティアについての意義をより強く認識していただく契機となった。本プログラムにおけるシニアボランティアが年齢よりも若々しく意欲的に取り組む姿勢が評価され、病院における子育て支援というボランティア活動の新たな一面を拓くことに繋がった。

ボランティアも医療現場の厳しさをより深く認識し子どもたちとのかかわりの中で限られた自分たちの使命を追求することができた。その結果、本プログラムが研究期間を終了しても、各々のボランティアがそれぞれの地域で類似のプログラムを構築し、その核となり普及活動に取り組むこととなった。

本プログラムを行う中でシニアボランティアと子どもたち、またその保護者と医療関係者など世代を異にする連携を行ったことにより、世代間断絶を緩和し融合に向けての社会改革の一助になった。

(2)教材の開発

手乗り紙芝居の作成

病院の机という狭いスペースで手軽に取り組める教材、進度に応じて切り離すことのできるペーパー型ドリルを開発

手乗り紙芝居の英語版を 100 部作成し、2013年1月に行われたHawaii International Conference on Education,12th conferenceにおいて配布した。

(3)海外との連携

ワシントン州立大学教授マット・キャプラン氏は2013年10月6日に芦屋市民センターで米国の世代間交流の現状について講演を行った後、本プログラムのボランティアにインタビューを行った。カプラン氏は本プログラムのシニアボランティアたちの志の高さに特に印象を強くし我が国特有の気質から生じるものではないかと結論づけた。アメリカでは本研究のようなシルバーボランティアによる病児への遊び・学び支援はまだなされていないが、ベビーブーマー世代の高齢化が押し寄せ、社会的な要請が高まっている。従って高齢者ボランティアが不足する小児医療に貢献できるプログラムの開発は急務である。州立ペンシルバニア大学のカプラン研究室で同様の研究を着手したいので、その参考する旨、今後の日米での共同研究の申し出があった。

山岡テイ氏(立正大学所属で本プログラム分担研究者)は小児病棟において先進的ケアで知られるニュージーランドにおける病児

へのボランティアプログラムの視察を行った。ニュージーランド最大の都市であるオークランドのキッズ・ファースト小児病院、ニュージーランド最大規模の総合病院スターシップ小児病院、さらにニュージーランドの主都にあるウエリントン小児病院、またクライストチャーチ病院の小児病棟などで主に小児のメンタルケアの環境について調査を行った。

乾清可氏(甲南大学所属、本研究協力者)はフランスのネッカー病児大学病院前でヨーロッパ子ども病院憲章前事務局長シルビア・ローゼンバーグ氏へのインタビュー調査を実施した。ローゼンバーグ氏は「病院の子ども憲章」ができる経緯を語った。まず1982年に「子どもの入院条件改善協会」を立ち上げ、病児の福祉向上を目指した。その後1988年にオランダのライデンで他のヨーロッパ圏内の12のアソシエーションとの連携を取り、第一回ヨーロッパ会議を開いた。この会議で「ライデン憲章」として知られている「病院の子ども憲章」が生まれた。その翌年に国連で「子どもの権利条約」が採択されると子どもの主体性が重んじられるようになり、病院の子どもたちの権利についても世の中の注目が集まりだした。1993年に「病院の子どもヨーロッパ協会」が設立され現在に至っている。病院における子どもの権利はまだ不十分であるので、フランスにおいても今後の課題は山積しているとのことであった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

栗山昭子、山田理恵子「世代間交流による患児への遊び・学びプログラムの実践報告」『世代間交流研究』vol13、日本世代間交流学会、2013

〔学会発表〕(計 5件)

栗山昭子・山田理恵子・車川幸子・出淵重行「世代間交流による患児への遊び・学びプログラムの現状と課題」,日本世代間交流学会第三回名古屋大会,2012年10月,名古屋芸術大学

Akiko Kuriyama・Rieko Yamada・Sachiko Kurumagawa・Shigeyuki Izubuchi,A Study on Volunteer Programs for Children in Hospital,Hawaii International Conference on Education,12th conference,Honolulu,Hawaii Hilton Village,2013,Jan.

栗山昭子「世代間交流による患児への遊び・学び支援プログラムの実践的研究の報告」日本人間関係学会関西支部平成24年3月定例研究会,平成24年,3月10日,芦屋大学梅田キャンパス

栗山昭子・山岡テイ・山田理恵子・I P P ボランティア 自主企画シンポジウム「世代間交流によるシニアボランティアの患児への遊び・学び・支援プログラム」日本世代間

交流学会第5回姫路大会 2014年10月 姫路
商工会議所

鄭錦子・栗山昭子・山岡テイ 自主企画シ
ンポジウム「環境を活かした遊びと学び
の国際比較」国際幼児教育学会 35回富士吉
田大会 2014年9月

〔図書〕(計 2件)

栗山昭子編『世代間交流による遊び・学び
支援シニアボランティア養成プログラム』岡
出版、2013

「世代間交流によるシニアボランティアの
患児への遊び・学び・支援プログラムの実践
的研究」報告書 友野印刷株式会社 2014年
3月

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

(1)教材・マニュアルの作成

手乗り紙芝居の作成及び印刷 150部を小児
病院および小児病棟に配布

病院の机という狭いスペースで手軽に取り
組める教材、進度に応じて切り離すことの
できるペーパー型ドリルを開発し小児病院
に配布

マニュアル『世代間交流による患児を対象
としたボランティア活動養成マニュアル』を
岡印刷で作成し関連機関に配布

手乗り紙芝居の英語版を作成し、2013年1
月に Hawaii International Conference on
Education, 12th Conference において教育関
係者に 100部配布

(2)ホームページ等

関西世代間交流ホームページ内

<http://www.geocities.jp/kansaisedaikan/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

栗山昭子 (Akiko, Kuriyama)

芦屋大学・芦屋大学・教育学部・教授

研究者番号：90149641

(2)研究分担者

山田理恵子 (Rieko, Yamada)

芦屋学園短期大学・幼児教育学科・教授

研究者番号：10321142

山岡テイ (Tei, Yamaoka)

立正大学・心理学部・講師

研究者番号：60599900

栗山直子 (Naoko, Kuriyama)

追手門学院大学・社会学部・准教授

研究者番号：70368570

(3)連携研究者

乾清可

甲南大学・社会学部 応用社会学科・非常

勤講師